

癌性腹水および胸水を伴った卵巣乳頭状腺癌の犬の1例

A case of canine ovarian papillary adenocarcinoma with carcinomatous pleural effusion and ascites.

二瓶和美¹⁾、中道 潤¹⁾、小林佑年²⁾、内田和幸³⁾、小野憲一郎¹⁾

1) 日本動物高度医療センター、2) サンリツセルコバ検査センター、3) 東京大学獣医病理学研究室

Kazumi NIBE, Lun NAKAMICHI, Yuto KOBAYASHI, Kazuyuki UCHIDA, Kenichiro ONO, Hidehiro HIRAO

【要 旨】

卵巣腫瘍は、未避妊の老齢犬に発生する比較的稀な腫瘍であり、腺腫／腺癌、顆粒膜細胞腫、未分化胚細胞腫が多く発生する。腺腫／腺癌の発生頻度は低いが、他の卵巣腫瘍と比較して腫瘍形成が不明瞭で、診断に苦慮する場合がある。胸腹水が貯留するMeigs Syndromeは犬では卵巣腺癌に比較的多くみられ、胸腹水の貯留から卵巣腫瘍が疑われる場合もある。今回、癌性腹水から卵巣腫瘍を疑い、術後にMeigs Syndromeを発症した犬の卵巣乳頭状腺癌に1例に遭遇したので、その概要を報告するとともに他の卵巣腫瘍との臨床・病理的特徴を比較検討した。

【キーワード】

犬、卵巣乳頭状腺癌、癌性胸腹水 (Meigs-Syndrome)

【はじめに】

卵巣腫瘍は、未避妊の老齢犬に発生する比較的稀な腫瘍であり、海外の報告では犬に発生する全腫瘍の0.5～1.2%程度を占めると報告されている [1]。病理学的に卵巣腫瘍は、動物WHO分類により表層上皮由来、性索間質細胞由来、胚細胞由来の3つに大別され、それぞれ腺腫／腺癌、顆粒膜細胞腫、未分化胚細胞腫が多く発生する。サンリツセルコバ検査センターで病理組織検査を実施した犬の全腫瘍のうち、卵巣腫瘍の割合は0.9%であり、そのうち顆粒膜細胞腫が最も多く卵巣腫瘍の80%以上を占めていた。未分化胚細胞腫は全体の10%程度で、腺腫／腺癌の発生は最も少なかった。しかしながら腺腫／腺癌の発生頻度は低いものの、他の卵巣腫瘍と比較して、腫瘍形成が不明瞭で、診断に苦慮する場合がある。また胸腹水を伴うMeigs Syndromeは犬では卵巣腺癌に比較的多くみられ、胸腹水から卵巣腫瘍が疑われる場合もある。今回、癌性腹水から卵巣腫瘍を疑い、術後にMeigs Syndromeを発症した犬の卵巣乳頭状腺癌に遭遇したので、その概要を報告するとともに、他の卵巣腫瘍との臨床・病理的特徴を比較検討した。

【症例】

症例は、トイ・プードル、8歳11ヶ月齢、未避妊雌。腹囲膨満を主訴にホームドクターを受診し、腹水および子宮内の液体貯留を指摘された。腹水の原因究明のため試験開腹を実施したところ、胃・膵臓、腸管に癒着した腫瘍病変が確認され病変の一部を生検したが確定診断には至らず当センターを受診した。初診時に腹水は消失し、明

らかな病変も認められなかったため、ホームドクターで採取された生検材料を免疫組織学的に精査した。採取組織は炎症や線維化を伴う腹膜組織であり、中皮あるいは上皮様の細胞増殖が軽度に認められた。同細胞は免疫染色で Vimentin および Cytokeratin (AE1/AE3) に陽性であり、腹膜炎に起因する中皮細胞の増生が疑われた。以後、ホームドクターにて経過観察を実施していたが、第 163 病日に腹囲膨満（腹水貯留）が再発した（図 1.）。腹水は癌性腹水であったが、腹腔内に腫瘤病変は確認できなかった。画像診断では子宮蓄膿症が疑われ、卵巢腫瘍の存在も否定できないため、卵巢・子宮全摘出手術を実施した。摘出された子宮は子宮水症の状態であり、卵巢には囊胞病変以外に明らかな肉眼病変は確認できなかった。病理組織検査では、左右卵巢ともに表面にカリフラワー状の腫瘍巢形成が観察され（図 2.）、表面上皮に由来する腫瘍細胞が乳頭状に増殖していた（図 3.）。同病変は腹膜にも播種しており乳頭状腺癌および腹膜播種と診断した。術後化学療法としてカルボプラチンが投与された。化学療法終了後約 2 ヶ月で腹水が再発し、同時に胸水も認められた。腹水および胸水は同様の癌性胸腹水の細胞所見であった（図 4.）。再度カルボプラチンによる化学療法を実施し、胸・腹水は消失し、初診から 415 日経過後も胸腹水の貯留なく経過している。

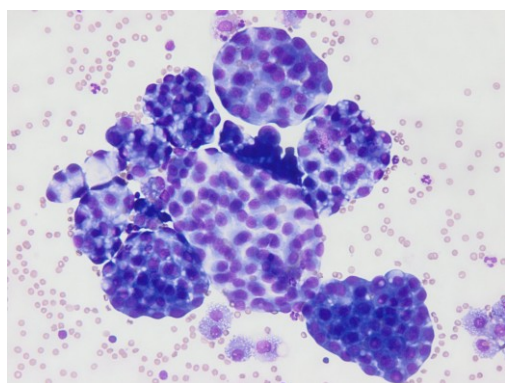


図 1. 腹水塗抹

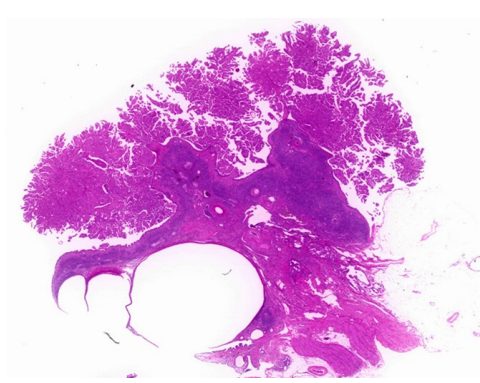


図 2. 卵巢ルーペ拡大像

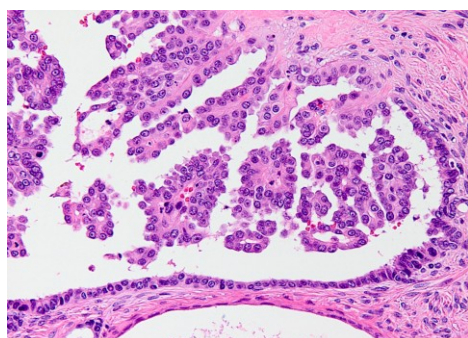


図 3. 腫瘍巢（中拡大）

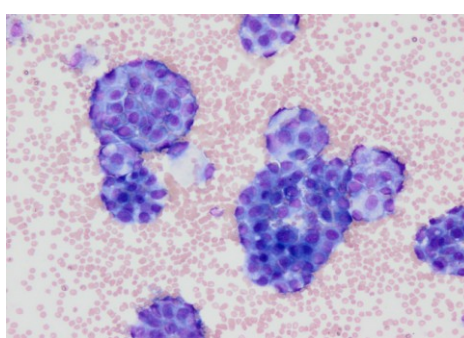


図 4. 胸水塗抹

【考察】

卵巢乳頭状腺癌は腫瘍細胞が卵巢表面で増殖するため、顆粒膜細胞腫や未分化胚細胞腫など卵巢実質内に腫瘤病変が形成される腫瘍と比較すると、画像診断あるいは肉

眼で初期病巣が確認しにくい場合がある。癌性腹水は種々の腫瘍で生じるが、通常は進行した病態で発症する。本症例では、原発病巣が小さいにも関わらず癌性腹水が生じており、これは本腫瘍の特徴の一つと考えられた。卵巣腫瘍に胸腹水を伴う場合を Meigs Syndrome と呼び、本症例でも術後の腹膜播種に起因すると思われる Meigs Syndrome が確認された。ヒトでは①卵巣の良性腫瘍（多くは線維腫）、②腹水・胸水の貯留、③腫瘍摘出により消失して再貯留しない、の3つを満たす場合を True-Meigs Syndrome とし、②および③のみを満たすものを Pseude-Meigs Syndrome と呼んでいる。本症例は乳頭状腺癌による胸腹水のため Pseude-Meigs Syndrome に該当する。鑑別診断として中皮腫が挙げられるが、卵巣の表面上皮も中皮に由来する細胞であり、腹水中に認められる腫瘍細胞は類似する。また中皮腫は腹膜表面で増殖するため、明らかな腫瘍形成がないことも卵巣乳頭状腺癌と類似するが、腹腔発生の中皮腫では通常は胸水を伴わないため、Meigs Syndrome の存在は卵巣腫瘍を疑う重要な所見と考えられる。犬の卵巣腫瘍に関する過去の報告では、顆粒膜細胞腫よりも乳頭状腺癌で Meigs Syndrome が多く報告されており、予後も顆粒膜細胞腫より悪い傾向がある。このため、未避妊雌で原因不明の腹水あるいは胸腹水がみられる症例では、卵巣腺癌を疑い早期に診断することが重要と思われる。

【参考文献】

1. Klein KM : Tumors of the female reproductive system, Small animal clinical oncology, Withrow JS, et al eds, 4th ed, 610-618, WB Saunders Co, Philadelphia (2007)
2. Meigs JV, Cass JW : Fibroma of the ovary with ascites and hydrothorax, *Am J Obstet Gynecol*, 33, 249-267 (1937)